地域をつむぐ「縁結び人」養成塾
集合研修 1 日目
講義「知多半島のネットワーク形成」
講師：松下典子氏（(特）ゆいの会　理事）

2012 年 8 月 20 日

・ 新しい一人一人の責任意識、新しい公共、新しい社会が動き始めて 20 年経った。
・ この 20 年間、私はずっとネットワーク形成に力を入れてきた。今日は知多半島のネットワーク形成の経緯を振り返りながら、ネットワークとはなにか、どう作るのかを話したい。

■はじめに
地域福祉サポートちたの歩みの資料をご覧いただきたい。NPO の基盤作りとその経緯を整理した。社会全体の視点を持ちつつネットワークを捉えたい。
次の資料の「生活課題（ニーズ）の把握、包括支援の仕組みについて」は、それぞれの共同体と生活課題の関係性を示している。みなさんが生活をしている地域、町内会は、市町村、県、日本、世界へと情報のネットワークがつながっている。
マスクメロンをイメージしてほしい。マスクメロンの周りには網の目がたくさんある。地域には目には見えないが、そのメロンの網の目のようなネットワークが張り巡らされている。また、いろいろいなコトを多様につなげていくときには、球体で考えることが重要である。

■この 20 年を振り返って
私は、1991 年にゆいの会を立ち上げた。みなさんの属している団体も、立ち上げ時には、目的、ミッションがあって立ち上がったはず。どうしたらそのミッションを達成できるか、自分は何のために実践をし始めたのか思い出してほしい。
年表には過去、現在、未来が描いてある。誰かがどこかで問題があることを発しない限り社会は変わらない。

私はこの生きにくい社会をどうにかしたいと思ってやってきた。これは、私の問題なのか、それとも地域の問題なのか、さらには社会の問題なのか。そんなことを考えながらなんとかしたいと思いやってきた。
「なんとかしたい」「変えたい」という市民一人一人の意思がネットワークの基軸になる。現場がなければ、問題解決の実態は分からない。共感してくれる仲間と対話をし、一歩先の議論の場づくりをすることで、情報共有とビジョンの共有を行ってきた。
また、私は社会構造の再構築と新しい世界観を求めた。特に女性の生き方について早い時期から問題意識として持ってきた。これは自分の問題としてだけではなく、社会の問題として捉えてきたつもりでいる。
ゆいの会を立ち上げると同時に、さわやか福祉財団の堀田力氏と勉強会を重ねてくる中で、ネットワークの重要性に気づき、そのための努力をしてきた。

では、解決のためにどうやってネットワークを作るのか。それにはまず社会的信頼の関係づくりと蓄積が重要だろう。1970 年〜1990 年は、成長経済を謳歌していた。そのころ、私も子育てをし、たくさんの問題意識を持つようになった。
日本はその後大きく変化し、私も、市民が動けばできるという実感を得るに至った。

1998 年、NPO 法が成立したのに合わせ、知多半島の多くの NPO が法人格を取得した。知多半島の NPO には学習期間、問題共有期間があったのだ。また、愛知県では協働ルールブックが 2004 年に作られた。これも当時はどこにもなかった。そこから協働という言葉が使われるようになったと記憶している。
今、2025 年がしきりと話題になっている。どんな社会になっていたら安心して暮らせるのか。

この 20 年間、私は運動をしてきた。その中で「市民意識改革」「社会の構造改革」の２つの重要性に気づいた。
一主婦として現場から積み上げる中で、現場の課題をどこにつなげれば、どんな影響力があるのかを考えてきた。これは私の問題ではなく、社会の課題だと捉えてきた。
ネットワーク形成は NPO の正しい理解をすることに尽きると思う。ぜひ NPO を学んでもらいたい。「学習制」「運動制」「事業性」。先ほど球体で考えると言ったことは、ヒトモノ金情報を立体的に常につないで行くことを意識することだと思う。

■改革の戦略
私は考え実践する中で
　①洞察力（視力）＝複眼、包括的（鳥の目、虫の目）
　②編集力＝重層的多面的立体的再編
　③実践力＝ボトムアップのマネジメント
の重要性を感じてきた。
洞察力は、グローバル化社会の中で、私たちに何ができるのか見る視点を言う。一人一人ができることは限られている。だからこそネットワークを作って共通の課題を社会にメッセージすること。
編集力は、自分たちの地域・現場から見て、新しく社会を動かして行くために、どことつながればいいのか考える。
実践力は、自分たちの活動エリアで、自分たちがどういうマネジメントをするかという点に尽きる。

■NPO の役割とは
「市民の意思をつなぐこと」。これは組織が変えるのではない。一人一人の意識がつながった組織が変える。
「新しい価値を創り出すこと」・「明るい未来を牽引すること」。それは一歩先をメッセージしていくことでもある。

■ボランティアと NPO と社会の関係
どこの NPO も元々資金は十分にない。共感する仲間がいるだけ。私たちがどうしたいかという一人一人の意志

がある。ボランティアは、特に無償のイメージが強い。確かに最初はお金がなかったが、安定する収入を確保しようとしてきたプロセスがある。
これこそ本来のボランティアだろう。自分たちの活動に一人一人が責任を持つこと。私たちの責任意識が社会を変える大事な力になる。
NPO が市場の中で組織として認められ、対等な関係にならない限り、NPO の未来はない。

1998 年に NPO 法ができ、社会的に責任を持って活動できる組織になった。それは社会に認められる一歩となったことを表している。本来、社協も NPO。自治会、町内会も NPO だ。しかし残念ながらボランティア活動や自治会町内会は行政主体の中進んでいる傾向が強い。日本の社会はこれまで「民間」と「行政」２つのセクターで作られてきた。
それに対し、市民が作り出すサービスが生まれてきた。それは新しい時代の始まりを表す。さらに大学で現場を学ぶことに、重要性・必要性が生まれ始めた。サポートちたは大学とも連携をしている。

■ネットワークをどうやって組み立ててきたか
一人一人の自発性と責任を持った方々が、なんとかしたい課題につながって組織ができた。これは人のネットワークでもある。共感する仲間が、すでに一つのネットワークとなっている。
知多半島は高齢者問題をきっかけにそのネットワークが立ち上がった。自分たちで検討したことで、多様なケースと問題が見えてきた。すると、組織の中で小さな事業がいくつか始まってゆく。やりたいことは必ずしも一つだけではないからだ。地域で暮らすということは、毎日の生活の中に様々な課題がある。それがつながって NPO は動いてきた。一つの組織が縦割りでなく、生活を包括的につないで問題解決をしていく。ここに事業のネットワーク、または、その基になる人のネットワークがある。このネットワークこそ、新しい公共の基盤になると考えている。
最初はどの事業も実験だった。例え時間がかかっても組織の中で提案されたことが新しい事業となってゆく。サポートちたは、ゆるやかなネットワークから法人格を取ることになったときに、たくさんの議論を重ねてきた。仲間の質を高め、確保して行くためにも法人格を取る決断をした。その結果、今も事業として続くヘルパー育成講座を始めるようになり、多くの方の役に立てていると感じている。

（サポートちたでは、組織を立ち上げてから）まずは県の担当課とつながった。その後、各市町の担当課につながった。毎年、5 市 5 町をことあるごとに回り、成年後見センターを立ち上げる際には、何度も足を運んだ。自分たちの思いを伝えること、対話、信頼づくりを大切にした。
まず、情報共有し、お互いの立場を分かり合うこと。その後に協議の場、それぞれの得意不得意を生かした実践につなげることをしてきた。

■市町村のネットワークづくり
市町村レベルで中間支援センターが、ネットワークづくりを黒子として応援することが重要だ。現場の人と対話をして、整理をしなければならない。また、必要な人を必要なところにつないで、協議の場を作ること。コ

ミュニティレベルでの動きも始まっている。そこでネットワークを作るのも、中間支援センターの機能だろう。しかしまだ、市町の中間支援センターはネットワークづくり、課題整理の役割を十分に果たせていない。もっと現場とつながり、現場の人の意見に耳を傾けてほしい。大切なのは地域。コミュニティ単位で、地域をどうしていくのか、協議の場を設けて行ってほしい。
新しい公共は、大きなところではなく、市民、現場から生まれる。

これからはトップダウンで来た行政と、市民生活から来るボトムアップ（市民主体のネットワーク）をそれぞれネットワークすることが重要なのだ。中間支援組織が人をつないでいく。
自分たちで自分たちの自治を担うこと。

■最後に
ネットワークはいつも ing（現在進行形）。それをいかに作って行くか。
そのためには、キーマンがいる。問題意識を持つかどうか、社会を変えたいと思うか。ネットワークは社会を変える力なのだから。黙っていては変えられない。